

前
入 学 試 験 問 題
国 語 (理科)

(配点八〇点)

令和七年二月二十五日 九時三〇分～一一時一〇分

注 意 事 項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、問題はすべて新課程と旧課程とに共通です。
- 三、この問題冊子は全部で十七ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 四、解答には、必ず黒色鉛筆(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 五、解答用紙の指定欄に、受験番号(表面二箇所)、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 六、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 七、解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。
- 八、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白や裏面には、何も書いてはいけません。
- 九、この問題冊子の余白は、草稿用に使用してもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 十、解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
- 十一、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

草稿用紙
(切り離さないで用いよ。)

第二 問

次の文章は『撰集抄』の一話である。これを読んで、後の設問に答えよ。

昔、御室戸みむろとの法印隆明といふ、やんごとなき智者、もろこしに渡り給はんとて、西の国におもむきて、播磨はりまの明石といふ所になん住みていまそかりけるに、あさましくやつれたる僧の、来たりて物を乞ふ侍り。さながら赤裸あかだかにて、糸のこを脇に抱き侍り。人、後先しりさきに立ちて、笑ひなぶりける。あやしの者やと思おぼして見給へば、清水寺きよみづでらの宝日上人にていまそかりける。ひが目まにやとよく見給へど、さながらまがふべくもあらざりければ、かきくらさるる心地して、伏しまるびて、「あれはめづらかなるわざかな」とのたまはせければ、上人ほゑみて、「まことに物に狂ひ侍るなり」とて、走り出で給ふめるを、人あまたして、取りとどめ奉らんとし侍りけれども、さばかり木暗こくらき繁みが入り給ひぬれば、力なくやみ侍りけり。

隆明法印は、あまりすべき方なく悲しく覚え給ひて、その事となく、その里にとまり居給ひて、広く尋ねいまそかりけれども、その後はまたも見えずなり給ひにき。さて里の者にくはしく事の有様を問ひ給へりければ、「いづくの者とも人に知られで、この村に住みても二十日ばかりなり」とぞ答へ侍りける。この事コト、限りなくあはれに覚え侍り。何と、げに世を捨つといふめれど、身のあるほどは、着物をば捨てずこそ侍るに、あはれにもかしこくも覚え侍るかな。

およそ、この上人はよろづ物狂はしき様をなんし給へりけるなり。ある時は、清水の滝の下に寄りて、合子がふしといふ物に水を受けて、隠れ所をなんし洗ひ給ふこと、常の態わざなり。いみじく静かに思ひ澄まし給ふ時も侍るめり。一方ひとかたならず見え給ひし。澄み渡る心の内は、いつも同じさきらなれども、外の振る舞ひは百ももに變はりけるは、よしなき人の思ひを、我のみ一方にはとどめじと思しけるにや。

この上人ぞかし、中関なかの白の御忌に、法興院こもに籠りて、曉方あかつきがたに千鳥の鳴くを聞き給ひて、

オ 明けぬなり賀茂の河原に千鳥鳴く今日もはかなく暮れんとぞする

と詠みて、『拾遺集』に入り給へり。明けぬるよりはかなく暮れぬべき事の、かねて思はれ給へりけるにこそ。かの『拾遺集』には円松法印と載りて侍るは、上人の事にこそ。

〔注〕 ○御室戸——現在の京都府宇治市にある三室戸寺。

○ゑのこ——子犬。

○合子——ふた付きの容器。

○さきら——才知。

○中関白——藤原道隆。

○法興院——藤原道隆の父、兼家が別邸を寺としたもの。

○『拾遺集』——三番目の勅撰和歌集。ただし実際には『後拾遺和歌集』に、ほぼ同じ歌が「円松（または円昭）法師」作として載る。

設問

- (一) 傍線部ア・イ・ウを現代語訳せよ。
- (二) 「この事、限りなくあはれに覚え侍り」(傍線部エ)とあるが、語り手はなぜそのような感じたのか、説明せよ。
- (三) 傍線部オの歌は、どのようなことを表しているか、説明せよ。

草稿用紙
(切り離さないで用いよ。)

第三 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

人恒病執着。然亦不可概論。良繇学以好成、好之極名着。

弈着射、遼着丸、連着琴与。夫着弈者、至屏帳垣牖皆森然黑

白成勢、着書者、至山中木石尽黑、学画馬者、至馬現於牀榻

間。夫然後以其芸鳴天下而声後世。何独於学道而疑之。

是故参禅人、至於茶不知茶、飯不知飯、行不知行、坐不知坐、

発篋而忘肩、出廁而忘衣。念仏人、至於開目閉目、而觀在

前、摂心散心、而念恒一。良繇情極志專、功深力到、不覺不知、

忽入三昧。亦猶鑽鑿者、鑽之不已而発焰、煉鉄者、煉之不已

而成鋼也。

概シテおもんばかりテ 慮ニ 其着ノ 而悠悠蕩蕩一 如ク 水浸石ノ 窮ニ 歷ストモ 年劫一 何益之有ノ

是故執滯之着不可有、執持之着不可無。

(雲棲株宏『竹窓二筆』による)

〔注〕

○羿着射、遠着丸、連着琴——羿は弓、遠はお手玉、連は琴の名人として知られる。

○弈——囲碁。

○牖——まど。

○森然——びっしりと。

○牀榻——ベッド。

○学道——ここでは仏道を学ぶこと。

○覲在前——仏などを観想すること。

○三昧——深く集中した境地。

○鑿——火打石。

○慮——心配する。

○蕩蕩——ゆつたりと気ままなさま。

○年劫——長い年月。

設問

- (一) 傍線部 a・b・d を平易な現代語に訳せ。
- (二) 「何独於「学道」而疑之」(傍線部 c) を、「之」の内容がわかるように、現代語に訳せ。
- (三) 「執滯之着不可有、執持之着不可無」(傍線部 e) とはどういうことか、本文の趣旨を踏まえて説明せよ。

草稿用紙
(切り離さないで用いよ。)